

早大藏『撫子の』百韻』訳注(三)

伊藤 伸 江・奥田 勲

換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめた。

早大藏『撫子の』百韻』訳注(三)

【凡例】

早稲田大学中央図書館伊地知鐵男文庫藏『集連』内に、細川勝元が発句を詠んだ『撫子の』百韻』が収録されている。この百韻は、張行年次は不明であるが、専順、心敬、行助、宗祇、宗怡ら連歌師が参加し、細川勝元とその家臣たちが張行した百韻で、多くの連衆が『熊野千句』の連衆と重なる。心敬が在京時に密接な関係をつなぐ。だ細川右京兆家とその家臣が連衆に入っており、その文化圏と心敬との関わりを考える上で重要な百韻である。それゆえ、伊藤と奥田は、心敬の連歌作品の研究を進めるにあたり、『撫子の』百韻』の表現分析が非常に有用であると判断し、この百韻の注釈作業を共同で行い、発表をなすこととした。従って、この訳注及び翻刻、解説は科研費基盤研究(C)「中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」(研究代表者伊藤、研究分担者奥田)の成果である。注釈等の執筆に関しては、伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交

一、底本は早大図書館伊地知鐵男文庫藏『集連』内に存する某年月日張行の賦初何百韻(『撫子の』百韻)である。該本は他に伝本を聞かないいわゆる孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。翻字本文は百韻として示してあるのを、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべ

て開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記したが、底本は虫損によって、欠字及び判読しがたい部分が若干存するため、本文を推定の上考察した句が存する。

一、各句には、折の表示とその折内の番号、百韻全体の通し番号を頭に示し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【二句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【考察】【補説】の項目も設けた。

※本訳注(三)末尾の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学日本文化学部論集』『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』掲載の訳注(一)(二)の引用文献典拠一覧及び参考文献をも兼ねている。通覧の際に参照を願うものである。

(二折 表 十二) 明日までを春の日数と思はばや

三四 過かこし □たはかすむ老が身 心敬

【式目】 述懐

【作者】 心敬

【語釈】 ●すぎこし方 過ぎて来た過去。自分が過かこして来た昔。「身のうさの過ぎこしかたにかはらずは今ゆく末もいかになげかん」(続千載集・述懐・一八七四・昭慶門院一条。「ただ幾度も身をかへりみよ／老いてこそ過ぎこし方もくやしけれ」(永正年間何路百韻「ひとはいさ」二〇／二二)。●霞む 霞んでいる。和歌では、年をとると、そのつらさに流す涙によって月が霞んだような状態に見える」と詠まれる。ここは、長く生きてきたゆえに、己が人生の記憶が遠く霞んでいること。「よなよなの月こそあらめ老いてみる花も涙にかすむ春かな」(続草庵集・見花・八六)。「かすむ夜をならひとときけば老が身のなぐさむ月は春のみや見ん」(宗祇集・春月・二三)。●老が身 年をとった身。心敬は、『心玉集』一四七九、一五四七、一六三七や『吾妻辺云捨』四一〇など、非常に多くこの語を使用する。「老が身の心の花は友もなし／さまざまに世はなりてかはれる」(顕証院会千句第六百韻・十一／十二・宗砌／超心)。「うき世の岸を別ると知れ／老が身は根を離れたる草葉にて」(心玉集・一四七八／一四七九)。

【付合】「春」に「霞む」を付ける。「霞む」は、言葉としては春を受

けているが、おぼろになった過去の記憶を表わすのに用い、述懐の句に転じた。前句が「三月尽」の句となったことから、もはや春の句を続けることはしにくく、ここで宗匠心敬が句境を転換したもの。また、万人共通の思いである、明日も春であればよいのにという未来の希望を詠んだ句に対して、老いた自分が過去をふりかえる形の句をだし、そうはいっても老いた自分は、とやや皮肉をまじえて転換した。この百韻の張行年月日は明らかではないが、仮に「熊野千句」(寛正五年の張行と推定される)の翌年とすれば、心敬は六十歳であった。

【一句立】 過こしてきた過去の思い出は、今はもう遠くおぼろに霞んでいる、そんな年老いた我が身。

【現代語訳】 (前句 せて明日まで、まだ私の命の春の日数と思いたいものだ。) 過こしてきた過去の思い出は、今はもう遠くおぼろに霞んでいる、そんな年老いた我が身。

(二折 表 十三) 過こし □ たはかすむ老が身

三五 □ 郷は□もかよはず成にけり

【式目】 雑

【作者】 不明。作者がわからないのは、この句と、第五十八句、第五十九句の三句であり、句上と百韻内で判明する各作者の詠数を比較

すると、作者として考えられるのは、心敬、行助、頼宣の三名である。第三十三句、第三十四句(前句)と、頼宣、心敬の句が続いていること、第五十九句に付く第六十句が行助の句であることも念頭に置くと、この句の作者は行助である確率が最も高く、第五十八句は心敬、第五十九句は頼宣の句とする推定が妥当であろう。

【語釈】 ● かよはず 通らない。「咲古典文庫こる花の雪重き枝／はらふべき風もかよはず霞む日に」(河越千句第二百韻・七四／七五・心敬／印孝)。

【付合】 老いを表現した前句に、時の経過を示す故郷に関連する句を付けたようである。

【一句立】 故郷は□も通わないようになってしまったことよ。

【現代語訳】 (前句 過こしてきた過去の思い出は、今はもう遠くおぼろに霞んでいる、そんな年老いた我が身。) 故郷は□も通わないようになってしまったことよ。

【考察】 この句は破損がはなはだしく、作者名もわからない。この和歌の破損箇所^所に推定される語句としては、「故郷」に「かよふ」ものゆえ、「人」「心」「夢」「風」「直路」「夢路」などの歌語があるが、次句が「夢」を詠みこんでいるため「夢」関係の歌語は除外されよう。

〔二折 表 十四〕□郷は□もかよはず成にけり

三六 いかなる夢を面影にせん

宗祇

〔式目〕恋(面影) 夢(夜分)

〔作者〕宗祇

【語釈】●いかなる夢を どんな夢を。つめたい振舞いをする恋人が夢に見えるか、それともやさしく接してくれる恋人が夢に見えるかは、非常に気にかかる所である。「とはばやないかなる夢を見る夜のなごりの袖のかくは濡るると」物語二百番歌合・二九〇・『夢河にさける』前関白。「面影のうきにははらで見えもせばいかにせんとか夢をまつらむ」(新後撰集・恋二・八七三・法印長舜)。●面影にせん あなたの面影として心に見よう。「花もがな面影にせんの辺のまののかやはら夏深き頃」(雅世集・夏草深・七四三)。

【付合】前句の「かよふ」に「夢」を付ける。「夢かよふ路さへたえぬ呉竹の伏見の里の雪の下折れ」(新古今集・冬・伏見里雪・六七三・藤原有家)。「空蟬のわが世むなしきから泊さてぞはかなき夢通ふらん」(松下集・旅泊夢・三三二二)。もはやまったく訪れの途絶えた故郷の現状に、せめて夢だけでも通えば、面影にする夢も選べるのという気持ちを付けた。

【二句立】一体どんな夢の姿をあの人の面影として心に浮かべようか。

【現代語訳】(前句) 故郷はもう□□も通わないほどになってしまっ

た。(あの人も今では夢の中でその姿を見ることができただけなのだ、せめて夢だけでもかよえば、面影にするような慕わしい夢も得られるのに。) 一体どんな夢の姿をあの人の面影として心に浮かべようか。

(二折 裏 一) いかなる夢を面影にせん

三七 恨み侘びぬるもねられぬ小夜更けて 元説

【式目】恋(恨み侘び) 小夜(夜分) ぬる(夜分)

【作者】元説

【語釈】●恨み侘び 自分の気持ちに答えてくれないあの人を恨み嘆いて。「恨み侘びほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなん名こそ惜しけれ」(後拾遺集・恋四・八一五・相模)。「みはてぬ夢ぞ行方はかなき／恨みわびぬれば松風おとづれて」(小鴨千句第五百韻・二六／二七・心敬／宗御、竹林抄九一九に再録)。●ぬるもねられぬ 寝るにも寝られない。「思ひわびぬるもねられぬ我が恋は伏見の里に住む甲斐ぞなき」(太皇太后宮小侍従集・伏見里・一八〇)。●小夜更けて 夜がふけて。「雨の音のきこゆる窓は小夜ふけてぬれぬに

しめる灯のかけ」(玉葉集・雨中燈・二二六九・伏見院)

【付合】「夢」に「寝る」、「小夜」を付ける。「夢トアラバ、面影：凡

夜之詞可付之。」(連珠合璧集)。「夜分 ぬるといふ詞」(連珠合璧集)。煩悶する余りに寝られず、夢など見られようもない様。

【一句立】つれないあの人を恨み嘆いて、寝ようとしても寝られないうちに夜が更けて。

【現代語訳】(前句 一体どんな夢の様をあの人の面影として心に浮かべようか。)つれないあの人を恨み嘆いて、寝ようとしても寝られないうちに夜が更けていくのだから。

(二折 裏 二) 恨み侘びぬるもねられぬ小夜更けて

三八 涙やくもる残るともし火 宗

【式目】 恋(涙) ともし火(夜分)

【作者】 勝元

【語釈】 ●涙やくもる 涙で目の前がくもるのであろうか。「わが袖の涙やくもる春の夜の月やかかすむとたれに問はまし」(親清五女集・七)。「昼間さへとへど涙やくもるらん／まばゆからじなさのみしのぶな」(三島千句第九百韻・三九／四〇)。●残るともし火 まだ消え残っている灯。「まちふけて今はとはじのひとりねに心ほそくも残るともしび」(沙玉集・寄灯恋・六〇七)。「花散りし野寺を訪へば春暮れて／のどけき風に残るともしび」(三島千句第十百韻・一五／一六)。

【付合】 来ない恋人を待つ夜更けの情景を付けた。

【一句立】 涙で目の前がくもるのであろうか。残っているともし火がぼんやりと見えている。

【現代語訳】(前句 つれないあの人を恨み嘆いて、寝ようとしても寝られないうちに夜が更けて。) 涙で目の前がくもるのであろうか。残っているともし火がぼんやりと見えている。

(二折 裏 三) 涙やくもる残るともし火

三九 降らぬ間も心に聞くは雨の音 行助

【式目】 雑

【作者】 行助

【語釈】 ●降らぬ間も 雨が降らないうちも。「降らぬ間も雲の行き来はとだえねば月影うとき五月雨の頃」(等持院殿百首・夏・二八)。
●心に聞く 和歌や連歌には珍しい表現でほとんど見えない。実際に遠く隔たつた場所を眺めながら聞えてこないその場所の音声を想像する歌が正広に見られるが、ここはそうした眺望の句ではない。「夕日さす雲まの峰の寺をみて音せぬ鐘を心にぞ聞く」(松下集・遠寺晚鐘・八三〇)。「舟のうちにこのよの岸を漕ぎはなれ／心にきくな騒ぐ松風」(文明六年一月五日何木両吟百韻・二三／二四・宗祇／元盛)。●心に聞くは雨の音 『伊勢物語』百七段及び『古今集』

七〇五番の逸話のイメージを持つ表現。雨が降るとそれほど熱心でもない恋人はわざわざ訪ねてはこない。それゆえ、雨の音によって（恋人が来ないから）、我が身が愛されていないことがわかってしまう。「藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしりて文つかはせりけることばに、いままでく、雨の降りけるをなむ見わづらひ侍るといへりけるを聞きて、かの女にかはりて詠めりけるかずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」古今集・恋四・七〇五・在原業平。

【付合】前句の「残るともし火」は「耿耿残灯背壁影 蕭蕭暗雨打窓声」（和漢朗詠集・秋夜・二二三三・上陽人・白居易）からの語句であり、そこから「ともしび」に「雨」を付けている。この白居易の詩句「耿耿残灯背壁影」からは、新古今歌人が多く想を得、「消えやらで残る影こそあはれなれ我が世ふけそふ窓の灯」（道助法親王家五十首・閑中灯・九九七・藤原家隆）のように心情を添わせて表現する和歌が生まれ、さらに、京極派歌人たちにより象徴性を持った和歌が詠まれていく。

付句は、一句では雑の句だが、語釈で述べたように恋のイメージがあり、付合でははつきりと冷たい恋人を待つ女性の姿をえがきだす。

【一句立】降っていない間も、心に聞いているのは、雨の音なのだ。

【現代語訳】（前句 来ない人を待つて流す涙で目の前がくもるのか、夜更けて残っているともし火がほんやりとしか見えない。）雨が降らない時でも、あの人に愛されていないことをはつきりと感じる私の心が聞いているのは、降れば恋人が来なくなるその雨の音なのだ。

（二折裏 四）降らぬ間も心に聞くは雨の音

四〇 住める太山ぞ瀧のもとなる

頼宣

【式目】雑 瀧（山類・用） 瀧只一、名所一、滝津瀬一、花の瀧・泪の瀧

等、此外なるべし。（一座四句物）太山（山類・体と類推）

【作者】頼宣

【語釈】●住める太山 自分が住んでいる深い山奥。「しづかなれ住めるみやまの滝つ浪／松吹く風の近き暁」（三島千句第七百韻・九一／九二）●瀧のもと 瀧のあるそのあたり。瀧は深い山の中にある。「岩かくれ浪こす山の瀧のもとよりこぬ夏をはらふ白玉」（草根集・深山泉・三一九六）。「川は底なる峰のかけはし／猿さけぶ声さへ寒き滝の本」（顕証院会千句第九百韻・四／五・原秀／専順）。「み山の里はたゞ瀧の本／行月は水のいづくに流るらん」（小鴨千句第六百韻・五八／五九・心敬／賢盛）。

【付合】「雨」に「瀧」を付け、情景を一新し、雨の音のように心に響いていたのは瀧の音であったと種明かしをした付合。「瀧トアラ

バ、雨（連珠合璧集）。「木の間洩る月に雨聞く奥山の滝の岩屋に猿叫ぶ声」（草根集・故山猿叫・五八一・宝徳元年七月二十三日詠）。

【一句立】私が住んでいる山奥は、ちょうど滝の落ちる近くのなだ。

【現代語訳】（前句）雨が降っていなくても、雨音を心に聞いているかのように思える。なぜなら、私が住んでいる深い山奥は、ちょうど滝のある所で、いつも滝の水音がしているのだ。

（二折 裏 五）住める太山ぞ瀧のものとなる

四一 石ばしる水は軒ばに遠からで 常安

【式目】 雑 水（水辺・用） 軒（居所・体）

【作者】 常安

【語釈】 ●石^{いし}ばしる 水が岩にあたり、しぶきをあげて流れること。

「滝」にかかる枕詞として機能する。「いしばしる滝なくもがな桜花手折りてもこむ見ぬ人のため」（古今集・春上・五四・詠み人しらず）。

「いしばしる水の白玉数見えて清滝川に澄める月影」（千載集・秋上・

二八四・藤原俊成）。「上代の枕詞「いしばしる」（石走）の「石」字

を「いし」と訓じて「いしばしる」の語が生じたらしい」（古語大鑑）とされる。平安から鎌倉の歌人は好んで「いしばしる」を使用した。例えば「石走る垂水の上の早麻のもえいづる春になりにけるかも」（万葉集・一四三二・志貴皇子）は、『類聚古集』の読みでは

「いしばしる」である。なお、同歌は仙覚の『萬葉集註釈』では「岩そぞく」であり、宗祇注とされる『万葉抄』も同様。四一句は「石」

が漢字であるため、読みはわからないが「いしばしる」か。同時代の歌人正徹にも「石ばしる」を用いた歌は多いが、同時に全て「滝」を詠みこんでおり、古今集歌の影響下にあると考えられる。「石ば

しる滝のしら淡わかへり水の心や五月雨の空」（草根集・夏滝・三二二、三三七一（重出））。「霧のぼる滝つ河音ふくる夜に／月さへ早し石ばしる水」（三島千句第四百韻・五五／五六）。

【付合】前句の「瀧」に、前掲古今集五四番歌、千載集二八四番歌などから「石ばしる」「水」と付けた。

【一句立】しぶきをあげて流れる水は家の軒端から遠くない所にあつて。

【現代語訳】（前句）私が住んでいる深い山奥は、ちょうど滝の落ちる近くのなだ。しぶきをあげて流れる水は家の軒端から遠くはな

（二折 裏 六）石ばしる水は軒ばに遠からで

四二 苔の雪の落つる麓屋 元説

【式目】 雑 雪（水辺・用と推定） 麓（居所・体）

【作者】 元説

【語釈】●苔の雫 苔につたう雫。「苔トアラバ、しづく」(連珠合璧集)。「山深み苔のしづくの声ぞ添ふ梢の雪や春になるらむ」(心敬集・残雪・四)。「苔のしづくにのこる春雨／瓦樋の軒のつら、のうちとけて」(文安雪千句第三百韻・三四／三五・救信／智盞)。「柴の戸に夜焼く妻木出でてほせ／苔のしづくの深きふる里」(河越千句第六百韻・二七／二八・長敏／義藤)。「苔」は、山深い地を想像させ、また同時に、既に経過した長い年月を示唆するゆえ、以下のように、古寺とも詠まれる例がある。「苔のしづくの落る立石／難波なる寺の鳥居の年をへて」(行助句集・一九七／一九八)。

●薨屋 瓦葺きの屋根の建物。この語は、瓦を焼く小屋の意味で、煙と共に恋歌に詠まれてきたが、この時代には、正徹と正広が新たにこの語句を瓦葺きの建物として詠んでいる。「かはら屋はふるとも知らで落葉しく庭に霰をさく嵐かな」(松下集・屋上霰・二一八七)。「楸散る木の下露に袖濡れて／月は夕べも清き薨屋」(親当句集・三六一／三六二)。

【付合】正徹の和歌には、「薨屋」で瓦葺きの寺院を詠むものがある。この付合においても、寺院のイメージを呼び込めば、長い年月の間、信仰が守られてきている静かな山寺の情景となる。「寺トアラバ、軒のかはら」(連珠合璧集)。「秋の花を軒端の柵に折り散らしあかざらならずかはら屋の奥」(草根集・秋寺・五九五二)。「奥深き軒の

かはらに松ふりて花にかすめる春の灯」(正徹千首・古寺花・一一二)。「寺ふりて軒のかはらの色もなし苔より落つる露の月影」(柏玉集・古寺月・八六四)。「聞やたれ軒のかはらにむす苔のしづくも法の声ならんとを」(為和集・古寺苔・三八九)。

【二句立】苔につたう雫がしたたる瓦葺きの屋。

【現代語訳】(前句) しぶきをあげる水は、軒端からほど遠くないところを流れ、苔むした瓦からは雫がしたたる、瓦葺きの屋。

【考察】「苔の雫」は、和歌において、正徹、心敬、正広が集中的に使われており、正徹周辺で歌に取り上げられたということができる。中でも正徹には、深山に住む隠者の生活に密着する景物ととらえる視点からの歌が見られる。「竹の樋にうけてぞ結ぶ山岸の苔のしづくのつもる流れを」(草根集・山家水・九九八・春日社宝前詠百首和歌・宝徳三年四月廿一日〜廿五日詠)。「岩がねの苔のしづくも木隠て音に心をすまず宿かな」(草根集・閑居・二九四・応永廿七年二月十七日聖廟法楽詠百首和詞)。

(二折 裏 七) 苔の雫の落つる薨屋

四三 生いでぬ朽葉が下の松の種 専順

【式目】冬(朽葉) 松与松(可隔七句物) 松(植物)

【作者】専順

【語釈】●生いでぬ 芽を出し育つて来たこと。「年ふとも我忘れぬ

や逢坂のしののをすすきおひ出でぬらん」(夫木和歌抄・薄・四四一

二・詠み人しらず)●朽葉 散り落ちた後に腐り朽ちた葉。「落ち

つもる朽ち葉が下をかきかへし誰がため拾ふ木の実とかしる」(基

俊集・九六)●松の種 この語も和歌では細川道賢・正徹、正広の

詠のみしか見られない。正徹周辺で和歌に使われた語句である。

「たれ恋ひん梢に根ざす松の種生行後の風の夕暮れ」(草根集・寄宿

木恋・七四九一・享徳元年四月七日詠)。「空にまけ月を心の松の種

／いはほはつたに紅葉する比」(小鴨千句第十百韻・発句／脇・之基・

宗砌)。「種をたれまくすのかかる岩ね松」(宗砌連歌愚句・発句部・

二五一・宝徳元年八月十九日忍誓得業坊の千句に)。

【付合】すでに経過した長い年月を示唆する「苔」を受けて、この先

の悠久の時を表現する「松」を、その芽生えの形で表わして付けた。

「苔トアラバ、松がね」(連珠合璧集)。「瓦トアラバ、松 寺」(連珠

合璧集)。苔からしづくが落ちるじめじめした地では、落ち葉は朽

ちてしまう。「山陰や軒端の苔の下朽ちてかはらの上に松風ぞ吹く」

(玉葉集・山家歌の中に・後京極摂政良経・二二二〇)。

【一句立】芽をだしたことよ。湿った朽ち葉の下にあった松の種は。

【現代語訳】(前句 苔むした軒からは雫がしたたる、瓦葺きの屋)。

そんな湿った朽葉の下からは松の種が芽を出したことだ。

(二折 裏 八)生いでぬ朽葉が下の松の種

四四 思へば千代の末ぞ久しき 通賢

【式目】賀(千代)

【作者】通賢

【語釈】●千代の末 長い年月の先。「行末を思ふも久し姫子松いま

より君が千代をちぎりて」(新拾遺集・賀・六九五・藤原忠季)。「身

の盛二度なきを恨にて／思へば千代も一時の夢」(初瀬千句第六百

韻・九三／九四・宗砌／梁心)。

【付合】前句の「松」に「千代」を付ける。「立ちかへる美濃小山の

松の種なほ榮ふべき千代の行末」(堯孝法印日記・二二・文安二年(一

四四五)十二月三十日の細川右馬助入道道賢よりの詠)。「人は猶梢

に根ざす松の種思ひをつきて千代なかさねぞ」(草根集・寄宿木恋・

四七三七)。

【一句立】思えば千年ものその先の年月は実に長いことだ。

【現代語訳】(前句 芽をだしたことよ。湿った朽ち葉の下にあった

松の種は)思えばこの松が育ち緑を保っていく、千年もの先の年月

とは、長い時間であることよ。

(二折 裏 九)思へば千代の末ぞ久しき

四五 思ひこしはじめも知らぬ秋の月 心敬

【式目】 秋（秋の月） 月如此光物（可隔三句物） 月与月（可隔七句物）

【作者】 心敬

【語釈】 ●思ひこし ずっと物思いにふけてきた。月をながめて物思いにふけることは、心敬の時代よりはるか昔からなされてきた。

「老いぬれば今年ばかりと思ひこしまた秋の夜を見るかな」（新勅撰集・雑一・一〇八六・藤原家隆）。「思ひこしあはれそこらの年月を今言ふばかりはや語らなん」（新撰和歌六帖・「人づて」・一四九二・藤原為家）。●はじめもしらぬ 輝きははじめたその始まりの時もわからないほど遠い昔の。「忘れずやははじめもしらぬ空の月かへらぬ秋の数はふりつつ」（拾遺愚草・対月問昔（建久五年八月十五夜左大将家詠・二二九〇））。

【付合】 「末」に「はじめ」を相対させ、遠い未来の世を思う前句から、はるか昔の過去をふりかえる付句に句境をはっきり変化させた。前句に「思へば」、付句に「思ひこし」と「思ふ」があえて重ねて用いられている。四二句から四四句まで、今昔、幼長の対比で句が作られてきたが、心敬はその流れを受け継ぎつつ、巧みに秋の季の句に変えていった。

【二句立】 物思いの対象とされたその初めがいつのことかもわからないほど、古くから輝いている秋の月よ。

【現代語訳】（前句） 思えば千年先までもずっと輝いていることだろう。（美しさにひかれ、はるか昔から人々がながめて物思いにふけた月。物思いの対象とされたその初めがいつのことかもわからないほど、古くから輝いている秋の月よ。）

（二折 裏 十） 思ひこしはじめも知らぬ秋の月

四六 夜もあかつき□よりは冷じ 宗怡

【式目】 秋（冷じ） 夜分

【作者】 宗怡

【語釈】 ●夜もあかつき 夜も暁頃になって。「ほととぎすよも暁に鳴きすてて／亡き人恋ふる袖ぞひがたき」（称名院追善千句第一百韻・八三／八四・紹巴）。●冷じ 冷え冷え、寒々とした様。「大方秋の寒きを言へるなり」（分葉）。「秋の心、すさまじ」（連珠合璧集）。「すさまじや闇の埋火みなつきて灰もぬるさぬ暁の袖」（草根集・暁爐火・四一四八）。「あらしのみ吹く大原の秋／川音も冷じき夜の月ふけて」（熊野千句第五百韻・八八／八九・心敬／宗祇）。「すさまじき細江の水につりたれて／あかつき月の舟の秋風」（心敬僧都百句・二二二一／二二二二）。

【付合】 引続き夜分の句を付けている。

【二句立】 虫食いによる欠字があり、句意不明。

【現代語訳】(前句 物思いの対象とされたその初めがいつのことかもわからないほど、古くから輝いている秋の月よ。)

(二折 裏 十二) 夜もあかつき□よりは冷じ

四七 山かげの垣□に鹿や来鳴きたつ 宗

【式目】秋(鹿) 山かげ(山類・体) 鹿只一 鹿の子一 すがる一(一座三句物)

【作者】勝元

【語釈】●山陰 山の陰になっている場所。ふもとのあたり。「山陰」と「鹿」の組み合わせは看聞日記紙背連歌に多く見られる。「山陰のことさらすく鹿鳴きて／捨てし身にさへ秋ぞ苦しき」(看聞日記

紙背応永二十九年三月十五日何路百韻九／十蔭藏主／庭田重有)。

「里には見えぬ鹿の通ひ路／山陰は急ぐか木々の初紅葉」(看聞日記紙背応永三十一年三月十八日山何百韻・一四／一五・庭田重有／無記名)。

●垣□ 「垣根」もしくは「垣ほ」か。和歌を見ると、「山陰」には「垣根」が結びつくが、くずし字は「根」ではない。「山陰のかきねを宿とさだめてや竹をはなれずうぐひすのなく」(伏見院

御集・鶯・一八二五)。「山陰にいまはかきねやしめおかん身を卯の花の咲くにまかせて」(前撰政治家歌合(嘉吉三年)・初夏・一〇八・

畠山持純)。

●来鳴き立つ 来てしきりに鳴く。「来鳴き立つ」は和

歌、連歌共管見に入らない。「来鳴く」もしくは「来鳴きとよむ」「来

鳴きとよます」の形であれば、万葉語として雁、ホトトギスなどの

鳥に使われ、「来鳴く」は平安から中世にかけて少数ではあるが用例が続く。ただ、「来鳴く」の例として、鹿に使われるのは他の用例が

ない。「初雁のきなくときはの杜の露ぞめぬしづくも秋は見えけり」

(新後拾遺集・秋上・三四一・前中納言定家)。「橘の散るは色音を惜しむ也きなきし物を山ほととぎす」(草根集・郭公・五七三五・宝徳

元年五月廿六日詠)。「くひなの来鳴く川上の里／鶯の根芹をつみて

あらふ日に」(行助句集・四八一／四八二)。また、通常「鳴き立つ」の形では、鳥に使われており、ここでの鹿を主語とする「来鳴き立つ」はやはり異例の使い方であろう。

【付合】秋の前句に、やはり秋の景物である鹿を付けている。

【一句立】山のもとの庵の垣のあたりには、鹿がやって来てしきりに鳴いて立っているのだろうか。

【現代語訳】(前句 句意不明) 山のもとの庵の垣のあたりには、鹿がやって来てしきりに鳴いて立っているのだろうか。

(二折 裏 十二) 山かげの垣□に鹿や来鳴きたつ

四八 小野てふ里ぞ谷をかけたる 宗祇

【式目】雑(小野) 里(居所・体) 谷(山類・体)

【作者】 宗祇

【語釈】 ●小野てふ里 現在の京都市左京区の一乗寺北のあたりから八瀬大原一帯をいう。小野という里。源氏物語において、浮舟が入水失踪の後、横川の僧都に見つけられ連れて行かれた里。「比叡、坂本に、小野といふ所にぞ住みたまひける」（源氏物語・浮舟）。「立ちまどふ夕の霧に鹿ぞなく昔よいか小野の山里」（松下集・鹿・五〇五）。「小野てふ里に近き大比叡／たづねつる人の行末を今聞きて」（因幡千句第七百韻・九八／九九・専順・紹永）。「露や寒けき小野の山里／夕まぐれうれへ顔にも鹿鳴て」（園塵第三・秋・六三三／六三四）。●谷をかけたる 谷に連なっている。「源氏物語」夢浮橋巻で、小野の浮舟の住まいからは「例の、遙かに見やらるる谷」との描写がある。「谷かけて岩根きびしき奥山に遅く桜を見る人やたれ」（拾玉集・春・二二二・一五）。

【付合】 鹿が間近にまで降りてきて鳴いているような山の庵の様を詠む前句に、山裾であり谷にも連なる小野の里のことであると具体的に付けた。「鹿の音を聞くにつけても住む人の心知らるる小野の山里」（新後撰集・秋上・三三〇・西行）。「小野てふ里」とわざわざ「てふ」と表現している点は、次の句で「斧」と掛ける形で生かされるか。「薪こるをのてふ里や炭竈にたえぬを焼くの煙たつらん」（通勝集・炭竈煙・一六八）。

【二句立】 小野という名前の里は、谷に連なっているのだ。

【現代語訳】（前句 山のおもとの庵の垣のあたりに、鹿がやって来てしきりに鳴いて立っているのだろうか。）そんな光景が普通に見られるのは、この小野という名の里が、山にも谷にも連なっているからなのだ。

（二折 裏 十三） 小野てふ里ぞ谷をかけたる

四九 冬ごもるけしきもしるく木を切りて 盛長

【式目】 冬（冬ごもる） 木（植物）

【作者】 盛長

【語釈】 ●冬ごもる 冬の寒い時期に室内に閉じこもること。「風寒しつま木こりつつ今日よりや小野の里人冬ごもるらん」（教長集・初冬・五二九）。●けしきもしるく 様子もあきらかか。「あめのしたけしきもしるくとる苗は水を心にまづぞまかする」（文治六年女御入内和歌・九五・藤原定家）。「春のけしきもしるき曙／面影の花に向かはぬ山もなし」（新撰菟玖波集・春上・一四一／一四二・藤原政行）。●木を切りて 冬、小野の里では、山人が薪にするための小枝（爪木）を集め、炭を焼く。「つくりなすあまたの柚木墨をうて／冬のかまへにこもる山人」（初瀬千句第四百韻・六三／六四・宗砌／超心）。「名のみなりけり小野の山里／たが宿もねやに炭焼く冬の夜

に」(心玉集・二二三〇／二二三一)。

【付合】前句の「小野」を「斧」に取り、木を切るさまを付けた。

【一句立】いかにも冬ごもりに向かうといった様子で、山里人は木を切っていて。

【現代語訳】(前句 小野という名の里は、谷に連なっている。)そんな斧の名を持つ里で、いかにも冬ごもりに向かうといった様子で、里人は木を切っていて。

(二折 裏 十四)冬ごもるけしきもしるく木を切りて

五〇 麻のたもとの雪払ふ見ゆ 実中

【式目】冬(雪) たもと(衣類) 雪(一座四句物)

【作者】実中

【語釈】●麻のたもと 麻の袖。麻は貧しい庶民の衣服に使われる

繊維。「露時雨ひとつにしほる山人の麻の袂もかくはぬれじを」(正

治初度百首・恋・一九八〇・二条院讃岐)。「うき世は秋の風にまか

せて／やつれそふ麻のたもとの露霜に」(浜宮千句第三百韻・五〇／

五一・宗因)。

【付合】前句の山人の様子に、山人の貧しく薄い衣とそこに降る雪を

付け、情景を詳しくした。

【一句立】麻の袂に降りかかる雪を払っているのが見える。

【現代語訳】(前句 いかにも冬ごもりのしたくをする様子と見えて、山人は木を切っているが)着ている薄い麻の衣の袂に降りかかる雪を払っているのが見える。

【引用文献典拠一覽】(訳注1～50)

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本(旧国歌大観番号)によっている。

権大納言言繼卿集：『新編私家集大成』所収群書類従本。

宗祇袖下：『連歌論集二』(昭和五七・三弥井書店) 所収九大附属図

書館本。

初学用捨抄：『連歌論集二』(昭和五七・三弥井書店) 所収筑波大学

附属図書館蔵本。

九州問答：『連歌論集上』(昭和二八・岩波書店) 所収高野山正智院

本。

梅春抄：『連歌論集四』(平成二・三弥井書店) 所収木藤才蔵氏蔵本。

梵灯庵袖下：『高津忠夫著作集第五卷 連歌俳諧資料』(平成一六・

和泉書院) 所収西高辻家蔵本。

難波：新潮日本古典集成『謡曲集下』(昭和六三・新潮社) 所収光悦

本。

宗御発句並付句抜書：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）
所収小松天満宮蔵本。

行助句集：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収大阪天満宮蔵本。

文安雪千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収東大寺図書館本。

ひとりごと：『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）所収国会図書館蔵本。

文和千句：古典文庫『千句連歌集』（昭和五三）所収小鳥居寛二郎氏本。

文安月千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収静嘉堂文庫本。

諸家月次聯歌抄：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収尊経閣文庫蔵本。

親当句集（赤木文庫本）：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収本。

寛正三年二月二十五日專順独吟何路百韻：日文研連歌データベース所収本。

宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収城崎温泉寺蔵本。

道行きぶり：新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』（平成六・小学館）所収桂宮本。

基佐集：古典文庫『桜井基佐集』（平成七）所収斑山文庫本。
連歌愚句：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収大阪天満宮蔵本。

專順独吟年次不詳何袋百韻：日文研連歌データベース所収本。

諸家月次聯歌抄：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収尊経閣文庫本。

井筒：日本古典文学全集『謡曲集(1)』（昭和四八・小学館）所収本。
下草（金子本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）所収金子金治郎氏蔵本。

芝草句内岩橋上：『心敬集・論集』（昭和二一・吉昌社）所収本能寺本。

園塵第三：日文研連歌データベース所収本（統群書類従本）。

老葉（毛利本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）所収明大図書館蔵旧毛利家本。

園塵第四：『早稲田大学蔵資料影印叢書 連歌集(二)』（平成五・早稲田大学出版部）所収早大図書館本。

小鴨千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収小松天満宮本。
応仁二年十月二十二日白河百韻：『統群書類従』第十八輯下『白河

「紀行」附載本。

寛正三年二月二七日何人百韻：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）

所収野坂元定氏藏本。

永享五年北野社法楽万句：日文研連歌データベース所収本。

太平記：小学館日本古典文学全集所収彰考館藏天正本。

氏真集Ⅱ：『新編私家集大成』所収本。

葉守千句：古典文庫『千句連歌集△』（昭和六〇）所収北野天満宮本。

萱草（伊地知本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）所収伊地知

本。

長享二年太神宮法楽千句：日文研連歌データベース所収本。

那智籠：古典文庫『那智籠（北野天満宮本）』（昭和五二）。

応仁二年正月朔日宗祇独吟何人百韻：江藤保定『宗祇の研究』（昭和

四二・風間書房）所収中村俊定本。

文安年間「山河」百韻：日文研連歌データベース所収本。

親當句集：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収赤木文

庫本。

顕証院会千句：古典文庫『千句連歌集Ⅱ』（昭和五五）所収内閣文庫

藏本。

寛正年間何船百韻「はらふべき」：日文研連歌データベース所収本。

寛正四年六月廿三日唐何百韻「蟬の羽の」：『心敬作品集』（昭和四

七・角川書店）所収太田武夫氏藏本。

美濃千句：古典文庫『千句連歌集Ⅳ』（昭和五七）所収大阪天満宮本。

永正年間何路百韻「ひとはいさ」：日文研連歌データベース所収本。

三島千句：古典文庫『千句連歌集Ⅴ』（昭和五九）所収鶴見大学藏本。

文明六年一月五日何木両吟百韻：『宗祇の研究』（昭和四二・風間書

房）所収中村俊定本。

行助句集：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収大阪天

満宮藏本。

『類聚古集』：龍谷大学善本叢書『類聚古集影印・翻刻篇上』（平成一

二・思文閣出版）。

『萬葉集註釈』：京都大学国語国文叢書別卷二『仁和寺藏萬葉集註釈

仙覺抄』（昭和五六・臨川書店）。